第44回児童生徒読書感想文コンクール

児童生徒読書感想文コンクールに、多くの優秀な作品が寄せられました。
先月に引き続き、最優秀作品を紹介します。

■中学校1年生の部　最優秀賞

命の大切さ

弟子屈中学校　田澤　沙月 さん

保健所や愛護センターで殺処分されてしまう、行き場のない犬や猫たち。日本では、年間どれくらいの数の犬猫が殺処分の運命をたどっているのか知っていますか？私は殺処分という言葉は知っていましたが詳しい事はあまり分かっていませんでした。題名『ひまわりと子犬の7日間』にある7日間の意味も知らず、表紙の子犬の写真のかわいさにひかれて読みはじめました。この本を読みながら私が疑問に思った事、それは主人公の里美が思った事と同じです。なぜ動物が大好きで動物園で働いたこともある父、彰司が犬や猫の殺処分をしなければいけない保健所で仕事をしているのかということです。その事を里美が彰司に聞いた時、彰司はなぜ保健所で働くことにしたのか、そう思うまでの事を話し始めました。小学五年生くらいの時に、ラジオで動物園の猿の話を聞いたそうです。その猿はもうすぐ死んでしまいそうで、その猿の飼育係だった人は一所懸命、猿の名前を呼びつづけ、今まで反応のなかった猿が最後の力をふり絞ってひと声ないたそうです。その声が飼育係の人には今までありがとうって言ってくれた様に聞こえたそうです。そのラジオを聞いた時、自分もそうなりたいって、飼育係以外でも生き物に関わる仕事では動物の心の友だちになるって決めたそうです。彰司の働いている所には、人間を敵対している犬がいます。その犬は自分の子犬を全力で守ろうとして人間に全くなつきません。でもその犬とも彰司なら心の友だちになれる、絶対に親子を助けられると里美は思いました。その話しをした次の日から彰司はできるだけ長い時間、母子犬のそばですごすことを決めました。そしてそばですごしている間、彰司はここにくるまでの母子犬はどんな暮らしをしていたか考えました。里美の母、千夏が言ったことを思い出したからです。

「人間と同じように、どんな動物にだって生きてきた歴史があり、物語がある。それが想像できれば、きっと心は通じ合える。」

私は素敵な言葉だなと思いました。それは彰司も同じだったと思います。そして彰司はこの母犬は自分たちの食料のために農家に入った時、その農家の人に石を投げられたり棒でたたかれたりしたんじゃないかと考えました。農家に行ったのは昔、飼い犬だった時に飼われていたのが農家だったのではないかと。でもなんらかの理由で野良犬になってしまい、人に捕獲されかけたりされたかもしれない、そんな日々の中で母犬は幸せな思い出を封じこんだんじゃないかと、そしてその時の記憶が戻れば飼い主が見つかると考え、処分の日をのばしました。しかしそれが所長にばれ、担当が終わる日に処分すると言われてしまいました。彰司が必死にせっとくしようとしても人間と犬をいっしょにするなと言われました。私はみためや食べる物が違っても命ある物に変わりはないと思います。その夜、彰司は里美とその弟、冬樹に明日が処分の日だということを伝えました。でも里美はまだ一日あるからあきらめちゃダメと言います。そして里美がその母犬にひまわりと名付け、名前付けたからもう家族、家族なんだから救えないなんて言わないでと言い冬樹も必死に伝えます。里美が家族って伝えるには抱きしめてあげればいい、お父さんとお母さんがしてくれたように、そう伝えます。そして処分の日、母犬にあやまり涙をながしました。その顔を見た母犬は野良犬になる前の日、飼ってくれていたおじいさんが涙を流しながら首筋をなでてくれた幸せな時を思い出し、その涙をなめました。ビックリしつつ、心を開いてくれたことがうれしくなった彰司は「子どもたちがひまわりって名前つけてくれた。家族になってくれるか？」と言いました。ひまわりのしっぽが動き、うん、家族になる。そういっているように見えました。そして無事、処分されずにすんだのです。

保健所に行く犬や猫はほとんどが捨てられた犬や猫です。捨てられる理由は、「引っこし先に連れていくのが面倒」、「世話が面倒」そして「成長して可愛くなくなった、飽きてしまった」という人間の身勝手な都合によるものです。中にはやむを得ない事情もあるかもしれません。でも大半がこういった身勝手な理由です。ペットを飼うことの責任は命をあずかるということです。ペットを飼う事の責任を深く考えず、軽い気持ちで飼い始める人がいなくならないかぎり、殺処分はつづきます。今では約一万六千匹が殺処分されています。殺しているのは保健所の人ではなく飼育を放棄した飼い主です。

書名『ひまわりと子犬の7日間』
五十嵐　佳子　著

（寸評）
沙月さんの感想文からは、「動物を大切にしてほしい」という力強い想いが伝わってきました。人間の身勝手さで、動物の命をなくすことなどあってならないという動物を飼うことへの責任について、改めて考えさせられる内容でした。最後の「殺しているのは、保健所の人ではなく、飼育を放棄した飼い主です。」という表現が、ストレートに突き刺さってきます。

そのほかの最優秀作品についても、来月以降順次紹介していきます。
※生徒の学年は、コンクールが行われた平成30年度当時のものです。

■中学校2年生の部　最優秀賞

精一杯、生きるということ

弟子屈中学校　宮田　奏海 さん

あなたは『十年』という期間を、長いと思うだろうか。それとも、短いと思うだろうか。

『余命十年』この本との出会いは、読書用の本を購入するために訪れた書店で本を探していたとき、派手な表紙の本に混ざってシンプルな表紙の本を見つけた。さびしそうにこちらを見つめる女性が描かれた本と、余命十年という衝撃のタイトルにひかれ、購入。これが、この本との出会いだった。

これは、主人公〝高林茉莉〟が二十歳の夏、数万人に一人の確率、つまり宝くじに当選する確率よりも低い確率で発症する不治の病であることを宣告される。と同時に、余命が十年であることを知らされた。茉莉は誰かを悲しませるから恋はしないと決めていたが、小学校の頃の同級生〝真部和人〟との再会から徐々に和人にひかれてしまうという物語だ。

私は、茉莉と自分の共通点を見つけた。それは、他人に嫌われることを怖がり、周りの意見や行動に合わせてしまう、という茉莉の性格である。私は、小学生の頃は言いたいことを何でも言える性格だった。だが、中学校に入学してからは、自分と周りの意見が違うと嫌われてしまうのではないか、と思うようになり、なんでも周りに合わせてしまっていた。思ったことをなんでも口に出しすぎるのもよくないが、伝えなくてはいけないことを伝えないのはよいとは言えない。あまり意見を口に出さない茉莉だが〝ありがとう〟〝ごめんね〟〝好きです〟この三つはしっかり伝えていた。なかなかできることじゃないので、感心した。

そして、一つ疑問に思ったことがある。それは、

「あとは精一杯生きてみるよ。」

という茉莉が日記に書いたフレーズだ。〝精一杯生きる〟とはどういうことだろうか。悔いなく生きること？楽しいことだけをすること？〝精一杯生きる〟の意味は直接この本に書かれていなかった。インターネットを使って調べると、「精一杯＝必死」ではないことに気づいた。精一杯という言葉は日常的によく使われる言葉だ。「精一杯、頑張ってね。」「精一杯、やってきて。」私も結構使ったり、言われたりする。でもそれは、必死にやるということではなかったのだ、と思えた。「自分の気持ちと向き合う」というようにネットでは書かれていた。茉莉は発症後、趣味を見つけ、打ちこんでいた。そして、休む。その生き方こそ、精一杯生きることだと思った。

この本を通して学んだことが二つある。一つ目は〝ありがとう〟〝ごめんね〟〝好きです〟を伝えることだ。茉莉は発病後の十年間でこの三つを伝えたり、伝えられたりしていた。私は普段〝ありがとう〟〝ごめんね〟〝好きです〟を直接伝えることは少ない。一番伝えなくてはいけないありがとうも言えずにいる。だから、伝えたいこと、伝えなきゃいけないことを素直に言えるようになりたいと思った。二つ目は、精一杯生きることだ。私は、あと四年で成人を迎える。四年なんて、きっとあっという間に終わってしまう。だからまずは、今を精一杯生きる。二度と来ない中学校生活を、存分に楽しむ。色々なことに挑戦し、時には休んで。そういう生き方をしたいと思った。

そして、この本からある言葉を思い出した。「今日私たちが生きた一日は、昨日亡くなった人が生きたかった明日」という言葉。そして今、私たちは昨日亡くなった人が生きたかった明日を生きている。だから、誰かのためにも自分のためにも精一杯生きることが大切だと思った。

書名『余命10年』
小坂　流加　著

（寸評）
奏海さんがこの本から学んだことで「ありがとう」、「ごめんね」、「好きです」を伝えることだとありました。自分の気持ちを伝えることは大切と思っていながらも、なかなか普段から素直に伝えられない人が多いはずです。そんな自分を素直な気持ちにしてくれる内容であると奏海さんの感想文を読み、伝わりました。